

卒業生の方 / Graduate | 2026.08.03

【茂住修身さんスペシャルソロインタビュー】原点は学生時代に ～経験ゼロから一流書道家へ～ (1/2)



Who are you?

戻る

SPECIAL INTERVIEW

原点は大学時代に ～経験ゼロから～流書道家へ～

書家 茂住 菁邨

「令和」の元号を揮毫したことで知られる、
本学卒業生の書道家 茂住菁邨さんが学生時代
を振り返り、これからの抱負を語りました

経済学部経済学科 1980年卒業

対象者別メニュー



「令和」の元号を揮毫したことで知られる、卒業生の書道家 茂住菁邨さんが学生時代を振り返り、これからの抱負を語りました

→ 令和の書家「茂住 菁邨」オフィシャルサイト



ご氏名
茂住 修身 (雅号：菁邨)

卒業学部
1980年 経済学部 経済学科 卒業

ご出身
岐阜県

ご経歴
・大学時代に書道部に入部、部長を務める
・青山杉雨（文化勲章受章・日本芸術院会員）に師事
・総理府（現 内閣府）に入府、内閣府大臣官房人事課辞令専門官になる

2019年、改元にともない「令和」の揮毫を担当

書家 茂住 菁邨
Mozumi Seison

大学で書道と偶然出会う

— 茂住さんは大学時代なぜ書道部へ入部されたのですか。 —

私は20歳まで目標というものを持てずに過ごしていました。自分が何をしたいのか、分からなかったんです。優秀な兄や妹と比べてずっとコンプレックスを抱いていましたね。



高校卒業後は短大に進みました。
て、その布団店を継ごうと思ってい
叶わなくなり、改めて大学へ入ろ
のが大東文化大学で、何となく将
した。入学が決まった後、先に東
が入った大東文化大学は書道が凄い

そこで初めて大東文化大学が漢
唯一の書道専門機関「書道研究所」
兄にコンプレックスを抱いていた利
るかも」と思い、書道部に入ろう

—そこで書道の世界に魅入られたのですか。

私の書道経験といったら子どもの頃に書道教室に一度通ったきり、
大東文化大学の書道部がどれだけレベルが高いのかまったく知りませ
んでした。書道部は全国の書道エリートの集団で、会派に所属し、展
覧会等での入賞経験もあり、大東文化大学の文学部に入って書道部に
入り、将来は書家か書道の先生になるのが目標、といった学生ばかり
でした。

私はまったくの初心者ですから話が合わないし小馬鹿にもされまし
たが、ムラムラっと負けん気が湧いて「絶対にこいつらに負けない」
と思ったんです。そこから1年、どういう書があるか勉強して、鍛錬し
て、書にのめり込んでいきました。初めてと言っていいくらいに、目
標というか無我夢中になれるものと出会ったんです。書道は準備には
時間がかかりますが絵画などと違い、瞬時に仕上げます。その一瞬の
芸術に惹かれた、といってもいいかも知れません。とにかく夢中にな
りました。

余談ですが書道部に入ったもう一つの目標は彼女を作りたかったん
です。彼女はすぐにできて、それが今の妻なんですが（笑）。彼女は書
家の娘で、初心者の私にとってどのような道具を使うのか、から始ま

って、どういふことを学んでいけばよいか、といったことを一から教
わることができたのも大きかったですね。

「今勝負したら負けるけど、俺はこれからぐんぐん伸びていって必ず
勝つ」とそう誓いました。

書道のイロハを学び書道の高みを目指す

—書道部で、書道家 茂住菁邨の土台がつくられたのでしょうか。

そうですね、書道部は個性的な人が揃い、自己主張が強く、たとえ
ば会派に入っていれば自分が所属している会派が最高だと思っている
から、批評会のような場でも血気盛んで、討議が喧嘩腰になるような
ことは日常茶飯事です。ただ書の実力はもちろん理論的にも素晴らし
かったですね。

今なら書道学科に入れば中国と日本における書道の歴史や漢文学や
日本文化史などの理論を学ぶことができますが、書道部では先輩方の
議論を通してそうした教養を吸収し、書の本質や技法、書風などの知
識を得ることができました。また当時の書道部は体育会系な気質で、
下級生にとって先輩たちは怖い存在でしたが、礼儀や人間関係など多
くのことを学びましたね。

私にとっては、自分の立ち位置も見つけることができたし面白かつ
たです。

一日々、書と向き合う、そういう学生時代だったのでしょうか。



良い作品を書きたい、作りたい、という気持ちがすごく強かった。

最近ある展覧会でギャラリートークをさせてもらい、若い世代の方とも話をしたんですが、私たちの頃とはずいぶんギャップを感じることがあります。たとえば「展覧会をやってどうなるんですか」「賞をとって何になるんですか」「それが就職に役立ちますか」といった発言を聞きます。

私たちはただ、他人とは違う作品を書きたい、誰もが納得するすごい作品を書きたい、そういう熱意がありましたが、今の若い人はそういう意識がちょっと少ない気がします。私はいろいろなところで話しているんですが、書道というものは、芸術というものは、新しいことへの挑戦なんです、誰もやっていないことをやりたい、発想力も想像力も創造力も必要です。

だから面白くて魅力があるんですよ。若い人たちはその魅力を感じていないのかも知れませんね。

—書道部では部長も務められましたね。

私は書道部が好きだったんですね。書道部の大方は文学部に在籍していて、私は経済学部だったのである意味冒険ですが、立候補しました。対抗馬も出ました。弁もたつし書の実力もある人です。

でも立候補したからには負けるわけにはいけないので、一年間の運営方針などを一生懸命アピールして、選挙に勝つことができました。執行部の人選にも苦労しましたが弱小ながらも体制ができて、一年間通してやり通せたことが私としては大きな経験になりました。

師匠 青山杉雨先生との思い出

—師匠である青山杉雨先生との出会いも在学時でしたね。

先生は書道研究所の所長も務められていたと思いますが、1年の終わり頃、初めて青山先生の書を見たときに「この字だ!」と震えがくるくらい感動して、先生の門を叩きました。以後、書道部の活動とは別に毎週先生の稽古を受けるようになりました。

先生は雲の上の存在であり、稽古のレベルは高く厳しかったです。付いていくために時間を惜しんで練習し課題を仕上げました。先生は1時間で70人、80人見ますから、指導も一言、二言で終わりです。お手本はいただけるんですが、たとえば字が体裁よく半紙のなかにおさまっていない、ということが2、3回続いて「うちには合わないからほかに行った方がいい」と言われてしまう人もいましたね。

まずお手本通りに書くことに向き合って、同じ位置がとれるようになったら「次は自分の線で書けよ」ということになります。

—青山先生は通常の講義はもたれていなかったのですか。

当時はまだ書道学科はありませんでしたが、文学部の科目に書道の科目が組み込まれていて、多くの先生が講義をもっていました。私は経済学部で講義を受けたいと思っていなかったけれど、書道の講義は受けたいと思っていました（笑）。

ですから本来聴講できないのですが、いわゆる「もぐり」で彼女の助けも借りてどの辺りに座ったらいいかも確認して、聴講していましたね。もちろん青山先生も講義を持っていましたから聴講したいのは山々なんですけど、行けなかったですね。先生には顔が割れているし、怖くて怖くて、そんな勇氣は出ませんでした。

—青山先生との思い出をご紹介ください。

青山先生は厳しく、近寄りがたかったことは確かですが、とても優しい方でもありましたし、お茶目なところもありました。思い出はいくつもありますが、嬉しかったことと言えば、私が部長を務めていたとき夏合宿への参加をお願いしたら、受けてくださったんです。そんなことはかつてなかったので、舞い上がるほど嬉しかったです。



作品を批評していただいたことはもちろん、麻雀のお相手を正座をして務めて足が痺れてどんな手役なのか分からなくなっていたことも良い思い出です（笑）。

また先生は人前で褒めることはまずなかったのですが、親族の方が渋谷で書道用品店を営んでい

て、そこにお見えになるときに独り
いです。「あいつな、良く書けてる
言で自分のことを認めていただい
のすごく感激しましたね。

→ 辞令専門職として総理府(現 内閣府)へ入府

← 前の画面に戻る

最新ニュース

2026.08.03 【茂住修身さんスペシャルソロインタビュー】原点は学生時代に ～経験ゼロから一流書道家へ～ (2/2)

2026.08.03 【特別座談会vol.4】卒業生×現役生 受け継がれる「舞台」のバトン (2/2)

2026.08.03 【特別座談会vol.4】卒業生×現役生 受け継がれる「舞台」のバトン (1/2)

Who are you?

対象者別メニュー

